

# 9 体 育 科

岡本 秀隆・川中 昌樹

## 1. 個が生きる体育科授業の評価とは

平成3年度から体育科では、「個が生きる体育科授業の評価」という研究主題を掲げて、一人一人の児童が主体的に取り組む体育科授業づくりと評価のあり方について研究を進めている。

これまでの研究では、一人一人の児童が自己に応じた学習のめあてを持ち、課題解決的な学習過程の中で自分なりの考えを集団の中で出し合い、深め合って技能や知識を習得し「わかる・できる」喜びを得るような授業構成をする。また、児童自身が学習状況をふり返り、成果を明らかにしながら、次の学習に生かしていく自己評価と授業構成の評価をし、改善を行う教師の評価が大切であることが明らかとなった。

そこで、一人一人の児童が「自己に応じた学習のめあて」を持って、集団の中で「自分なりの解決する考えを出し合って意欲的に取り組み、自らの学習成果を自己評価したりする」ことができるように指導の手だてを行った。「学習のめあてを持つ（把握する）場」「自分なりの解決する考えを出し合って練習する場」を設定することにより、児童は、自分や友達の考えのよさを認め合いながら意欲的に取り組む姿勢がみられるようになった。また、教師が「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能」「知識・理解」の4つの観点での授業構成の評価によって指導の改善を行った。しかし、児童自身が課題解決的な学習過程の中で自己に応じた学習のめあてや解決のしかたの考えを十分に持てなかったため、意欲的な取り組みができなかった。また、学習のめあての追求の場や学習状況のふり返りの場で学習状況の自己評価が十分に行われなかったため、次の学習のめあてや追求の見通しを持った取り組みにならなかった。

そこで、本年度は、一人一人の児童が運動の楽しさや喜びを味わいながら自己の関心・意欲・態度や思考力・判断力、そして、技能を高めて行くことができるようにするために、自己を高める評価力を育成する指導のあり方を中心に研究を進めて行くことにした。

## 2. 自己を高める評価力とは

体育科では、「自己を高める評価力」を『児童自らが学習のめあてを設定する場・めあてを追求する場・学習状況をふり返る場において評価をし、運動の楽しさや喜びを味わいながら新たなめあてや活動につなげていくことのできる力』ととらえている。例えば、学習のめあてを設定する場では、自己に合っためあてが設定できたか。めあてを追求する場では、めあての解決に向かって一人一人が考えを持って出し合いながら練習ができたか。学習状況をふり返る場では、学習のめあてに照らして学習状況を振り返り、自分や友達の解決の仕方よさや態度、技能の伸びに気づき、さらに、次時のめあてや見通しを持つことができたかを自己評価することである。この自己を高める評価力は、運動の楽しさや喜びを味わうことができる体育科授業を通して育成され、生涯にわたって運動に親しむ原動力になるものと考えている。

## 3. 自己を高める評価力を育成する体育科授業

自己を高める評価力を育成する体育科授業づくりをするには、次のような学習過程の構成や自己評価の手だてが考えられる。

① 課題解決的な学習過程を構成し自己評価を促す。

自己評価活動を促すためには、自己のめあてに照らして学習状況をふり返ることが必要である。そのためには、学年の発達段階に応じためあてが設定できるような、課題解決的な学習過程を構成することが大切である。

(ア) 学習のめあてを設定（把握）する場では、一人一人の児童が自己理解をし、自己に応じた学習のめあての設定や共通の学習のめあてを把握し、解決の仕方を工夫できるような自己評価をする。

(イ) 学習のめあての追求の場では、学習のめあてを解決する仕方を友達の動きの観察や個々の考えを出し合って話し合い、工夫し、練習によって追求することが大切である。一人一人の児童の学習のめあて解決の仕方の考えや取り組みのよさ、さらに、技能の伸びを明らかにし、認め合うことができるような自己評価をする。

(ウ) 学習状況をふり返る場では、学習のめあてに照らして自己の学習状況を学習カードを活用してふり返り、学習の成果を明らかにし、さらに、次時のめあてや見通しを持つことができるような自己評価をする。

② 学習のしかたや運動技能のできばえの自己評価を促すための手だて。

(ア) 学習のしかたの評価基準を設定。

学習のしかたの評価基準は、課題解決的な学習過程に即していくつかのレベルに分けて設定した。そして、授業の終末の段階で本時の学習の仕方を自己評価することによって学習の仕方を身につけ、自ら学ぶ態度を育成する。

(イ) 運動技能のできばえの評価基準を設定。

運動技能の評価基準は、運動技能の習得のポイントや段階をふまえて、できばえの段階に分けて設定する。また、全員が初めの段階から評価できるようにできばえの段階を設定する。

そして、できばえ1からできばえ4と段階にそって技能を習得することによって動きを高めることをねらいとする。

③ わかった・できたこと、教え合ったこと、次の学習のめあてを文章化による自己評価を促す。

学習を通してわかった・できたこと、教え合ったこと、次の学習のめあてを文章で書くことによって自己評価させる。これは、児童が学習のめあてを追求する中での思考や判断、友達とのかかわり等を自己評価することによって自分や友達の考えや動き、さらに、態度のよさを認め合うことをねらいとする。また、教師が児童の自己評価した文章によって学習の深まりを把握し、肯定的な言葉やさらに具体的な解決の手だてを書き添えることによって達成感や次の学習意欲を高める。

④ 教師の肯定的な評価による自己評価の促し。

教師の評価は、児童のすぐれた発言や技能の伸びを発見したときに即座に肯定的な評価をすることによって、そのねうちづけをすることができる。また、児童が自己の考えや動きのよさを評価する時に教師の観点や基準が基本となることが多い。このように教師の評価は、自己の考えや動きを評価する力を高めるのに効果的である。そこで、教師は、児童の発言や動き、態度を支援し、肯定的な言葉かけによる評価を忘れてはならないと考える。

参考文献

- (1) 宇土正彦『体育学習評価ハンドブック』大修館書店 1981年
- (2) 文部省『初等教育資料No.576』東洋館出版社 1992年
- (3) 『体育科教育第40巻4号』大修館書店 1992年
- (4) 安彦忠彦『自己評価』図書文化社 1987年